

## イタリアにおけるゲーテ

藤 本 正 幸

Goethe in Italien

Masayuki FUJIMOTO

Während seines ersten Weimarer Jahrzehnts verwickelte sich Goethe in viele Widersprüche. Und das Verhältnis zu Charlotte von Stein war schwierig geworden. So reifte der von Jugend auf gehegte Plan heran, nach Italien zu reisen. Am 3. September 1786 verließ er Karlsbad. Und über Brenner Verona Venedig Ferrara eilte er nach Rom. Mit einer wahren Begierde wandte er sich den Kunstschatzen in Italien und betrachte alles mit einem stillen feinen Auge. „Man muß auf alle Fälle wieder und wieder sehen, wenn man einen reinen Eindruck der Gegenstände gewinnen will“ So heißt es in einem Brief. Rom erschien ihm als die Einheit von Kunst und Natur. An der antiken Plastik, an Raffael, an Palladio, an Homer wurde ihm die Kunst offenbar. Am 6. September schrieb er so „Diese hohen Kunstwerke sind zugleich als die höchsten Naturwerke von Menschen nach wahren und natürlichen Gesetzen hervorgebracht worden. Alles Willkürliche, Eingebildete fällt zusammen, da ist Notwendigkeit, da ist Gott.“

ゲーテのイタリアへの旅は、1786年9月3日カールスバートを出発、1788年6月18日ワイマールに帰国するまで1年10ヶ月にわたるもので、彼が37才の時であった。ゲーテの生涯において、このイタリア体験は彼の精神にも、また芸術観にも決定的な意味を与えた出来事であった。ワイマールにおける彼の10年間の生活（1776年—1786年）は、政治家としての公務のため多忙を極めていた。作品「ファウスト」「エグモント」「エルペノール」「タッソー」「ヴィルヘルム・マイスター」は断片のまま完成出来ないという詩作への焦り、シュタイン夫人との関係、政治家として自らの理想が実現されないことへの失望、これらの内面的危機を脱し自らの新しい世界の拡大をはかるため、この旅行が計画されたのである。ゲーテの「イタリア紀行」(Italienische Reise) は、26年後の1816年に第1回ローマ滞在までを扱った第1巻が、そして翌1817年にナポリ、シシリアを扱った第2巻が出版されている。また「第2次ローマ滞在」(Zweiter römischer Aufenthalt) は、1829年に出版された。これらは単な

る旅行記、案内記ではなく、当時の日記及びシュタイン夫人やワイマールの友人達に宛てて書かれた手紙をもとに編集され、当初「我人生より詩と真実」(Aus meinem Leben Dichtung und Wahrheit) 第2部として計画されたものである。

これらの日記、手紙をもとにゲーテにとってイタリアとは、いかなる存在であったのか、そして何よりも彼は眼の人(グンドルフ)として、この旅行において何を見たのか、その足跡をたどってみたい。

## I

「早朝3時に、私はこっそりと Karlsbad を出発した。そうでもない、みんなが私を離そうとしなかったからである」

Den 3. September 1786

旅行カバンと毛皮つきの背のうを荷作りしただけで、単身郵便馬車にのりこみ一路 Rom へと向かった。前日9月2日の Stein 夫人への手紙<sup>1)</sup>では、この旅行への押えがたい衝動を述べ、さらに同日の Karl August 公への手紙<sup>2)</sup>において、無断で出発することへの謝罪や、無期限の休暇を願い出ていることから、この計画は秘密のうちに実行に移されたものである。7時半に Zwota, 12時には Eger に到着。翌朝10時には Regensburg に着いているのだから24マイル半の道程を31時間で踏破、9月5日には München に到着している。Bildergalerie で見た Rubens のスケッチに喜びを覚え、古代美術館の Drusus の像や Antonie 像は彼の注意をひいたが、Rom へと急ぐ気持ちは変わらない。

「Bildergalerie では、私は親しめるような気分にはなれなかった。私はまず絵画に眼を慣らさなければならぬ」「古代美術館では、これらのものを見る私の眼が、訓練されていないことがよくわかった。それ故、長くとどまり時を無駄にしたくはない」

München, den 6. September

まず眼を慣らすこと、物を見る眼を訓練すること、このことは彼のこの旅行における重要な課題であった。

9月8日、München から Mittenwald を通り Tirol に入る。アルプスの山々から Inn 河へ通じる溪谷沿に馬車を走らせつつ、大自然の眺望を眼の前にして、ゲーテは次のように述べている。

1) An Charlotte von Stein. Den 2. September 1786

Morgen Sonntags den dritten September geh ich von hier ab, niemand weiß es noch, niemand vermutet meine Abreise so nah.

Ich muß machen daß ich fortkomme, es wird sonst zu spät im Jahr.

2) An den Herzog Karl August Karlsbad den 2. September 1786

「自らの世界を創造するために……私の心の内部をさまようもの、自然の中で各人の眼の前に提示できるとは限らないものを、何とかして、はっきりと眼に見えるようにしてみたいと思っている」 Auf dem Brenner, den 8. September, abends

すべての物の本質を見ることが。彼の観察は単に絵画、建造物に限られていない。Tirschenreuth の町や Regensburg では道路にある花崗石や建築用材の石を、アルプスでは、地質や天候を、そして植物やそこに住んでいる人々と、あらゆる方面に眼をむけている。Weimar においては、彼はただ計画をたて、命令を与え、書きどらせればそれでよかった。また折にふれ書物によって知識を得ることが出来たのである。しかし、旅先においてはそうもいかず、為替相場に気がつかない、両替や支払いをしたり、メモをとり手紙も書かねばならないという生活であった。彼はにのような状況において、ある確信に達する。

「現在の私にとって必要なものは具体的な印象なのだ。重要なことは私が再び世の中に関心を抱き、自分の観察力をためし、そして自分の学問や知識がどの程度のものか、自分の眼が光り輝いているかどうか、自分がどれぐらいのことを敏速に把握することが出来るのか、刻みこまれた心のひだを再びもと通りにすることが出来るのかどうか、が問題なのだ」

Trient, den 11. September, früh

## II

9月16日 Verona にて、ゲーテは初めて古代遺蹟を見る。円形劇場はよく保存されており、中に入り上部の縁を歩きながら「何か偉大なものを見ているような、それでいて実は何も見ていないような不思議な気がしたという」印象を述べている<sup>3)</sup>。彼は観察を続け、古代においてこの円形劇場がどのような過程で建設されたのか頭の中に再現してみるのである。

「円形劇場というものはもともと、民衆をして、自己自身に対する畏敬の念をおこさせ、民衆自身をもって民衆を楽しませるように作られている」 Verona, den 16. September

古代において、何が注目に値する出来事が路上にて生じ、人々が集ってきた場合、後方にいる人々はあるとあらゆる方法を用いて、より前列に、そしてより高い場所を手に入れようとする。やがて人々は周囲の丘まで占領し、たちまちのうちに一つの噴火口が出来上がるのだ。このような一般的な要求を満足させるのが、古代における建築家の使命であり、しかも彼らはそれを出来る限り簡素に、民衆自身が、自らその建築物の装飾の一部になるように造り上げたのである。つまり、ここにおいて彼は民衆が自然の一部をなし古代遺跡と関わり合っている姿を見るのである。

3) Verona, den 16. September

「民衆がこのようにしてここに集った自らを見た時に、自分自身に対して驚嘆するにちがいない。というのは、民衆はいつもは自分達が右往左往する様子や、秩序や規則もなしに雑踏をなしている姿を見慣れているのに、……今や一つの高貴なる統合をみせ、単一体をなし、一つの集団に結合され、一つの精神によって鼓舞された、一つの形姿を自らに認めるのである。」

Verona, den 16. September

彼は今や見ることに専念している。眼を訓練すること、すべての本質を見抜くことが彼には重要なことである。円形劇場で彼が見た古代人と、自然と、建造物との関係はさらに発展する。

同16日に、彼は Verona 市やその近辺で収集されたエルトリア、ギリシャ、ローマの古代美術品の陳列所を訪れている。祭壇や円柱の断片、白色大理石の三脚椅子等の古代の遺物の中で一つの墓石を見つけた彼は感動をこめて述べている。

「古代人の暮場から吹きよせる風は、バラの花の咲く岡を越えてきたかのような香りをふくんでいた。この墓標は心のこもった感動的なもので、つねに生命をよみがえらせる」

Verona, den 16. September

妻と肩をならへ窓からでものぞくかのように壁がんに顔を出している男の姿、息子の中にはさみごく自然に顔を見合やす両親の姿、互いに手を取りあっている恋人達、彼が墓標に見たものは天にむかって合掌している人の姿ではなく、昔あったままの、そして現在あるがままのこの世の姿、夫婦のつどい、家族の団らん、恋人達の愛し合う姿を見たのである。ただ人間のありのままの現在を提示し、そのことによって人間の存在を永遠化しようとする作者の意図に深い感動を覚えたのである。

この芸術における現在という問題は Padua において、教会や集会所を見てまわった際にも言及されている。Mantegna の絵を見たゲーテは「これらの絵はなんと鋭い確実な現在を持っていることだろう！<sup>4)</sup>」と述べている。彼はそこに見たのは表面的効果でも、単に想像力に訴えるようなものではなく、確固とした純粋で素朴で明快な現在を、生活と芸術との完全なる一体化を見たのである。

「眼を慣らすこと」「眼を訓練すること」に始まったこの旅行もはつきりと発展のあとを示している。9月19日、Vicenza にて彼は Andrea Palladio 作の建築物である Basilika 会堂等を見物している。その時の彼の考察は興味深い。初めてその価値と偉大さを知った彼は、

4) Padua, den 27. September

この建築物はそれらの実際の大きさと具体性によって見る人の眼を満たしている。そして抽象的な正面においてだけでなく、遠近法上の前進と後進の全体における調和によって見る人の精神を満足させているのだ、と述べ、さらに Palladio の偉大さは、円柱と壁とを結びつけるという矛盾すら全体的な調和によって見る人に畏敬の念をおこさせたことにあるという考察である<sup>5)</sup>。

「真と偽から第三のものを形成し、そのものの仮の存在が我々を魅惑する、あの偉大な詩人のもつ能力と同じである」  
Vicenza, den 19. September

真と偽から第三のものが形成されるということ、それを見るということが彼には重要なこととなった。

9月27日、Padua にて植物園を散策し、南国の未知の植物を見てまわった彼は感慨を新たにしている。すでに知っている植物を見たところで、それはすでに知っている事物と同様、我々は結局何ひとつ考えることをしないのだ。彼は次のように述べている。

「思考をとまなわぬ観察は意味があるのだろうか？」(Was ist Beschauen ohne Denken?<sup>6)</sup>)

### III

「最初のゴンドラがやってきた時、私は20年も昔のあの玩具を久しぶりに思い出した。父はイタリアから持ち帰った美しいゴンドラの模型を所有し、ひどく珍重していた。だから私はこれで遊ぶことを許された時など、大変うれしかったものである」

Venedig, den 28. September 1786

1786年9月28日夕、Venedig に到着。造形美術において多くの天才を輩出し、特有の文化を生んだこの大都市を彼は詳しく観察している。全体の印象をつかむため、案内人もなしに一人町に出た彼の眼にうつったのは、何よりもこの町の民衆であった。彼は人々の挙動、暮らし方、風習、気質を観察し、この都市が一君主のものではなく、集合された人々の力が作りあげたところの偉大なる尊敬すべき制作物、一民族の壮大なる記念碑であることを知るのである。彼は次のように述べている。

「たとえ彼らの渦が次第に埋められ、有毒の霧が沼地の上に漂うことがあっても、彼らの

5) Vicenza, den 19. September

6) Padua, den 27. September

商業が衰微し、彼らの権勢が地に落ちることがあっても、共和国全体の基盤と本質は、一刻たりとも、これを見る者の畏敬の念をそこなうことはないであろう」

Venedig, den 28. September 1786

北方の世界がまだ暗黒のうちに閉ざされている時、彼らはすでにその土地を利用し隆盛を手に入れていた。この都市の興隆が他の都市と比較できない独特の過程を持っているように、人々もまた独特の文化を形成していったのである。

10月4日、彼は St. Lukas 劇場で見た喜劇について触れている。見たのは仮面を用いた即興の劇であった。Venedig の町で一日中繰りひろげられる光景がそのまま登場するのである。商人や買物客、乞食、ゴンドラの船頭、隣の女、弁護士と依頼人、このようなすべての人々が生活し、働き、叫び、歌ったり騒いだりするそのままの一日が、面白く粉飾され、そのまま劇になっていた。

彼は民衆がその喜劇のすべての基礎をなしているのを、見物人が一緒になって芝居をやり、民衆が劇場と完全に溶合し一体をなしている様子を一種の驚きをもって見ている。

「私はあの仮面劇よりもより以上に自然に演じられた芝居を見たことがない。このようなものは、すぐれて幸運に恵まれた天分を持つ人のみが、長い間の訓練によって到達せられるものだ」

Venedig, den 4. Oktober

10月8日 彼は Paul Veronese の絵を見るために Pisani Moretta 宮殿を訪れている。そして、そこで一つの意見を述べている。子供の頃から見ている対象によって眼が訓練され養われるということは明らかである。それ故 Venedig の画家は、他の都市の人間より、すべてのものを明瞭にまた快活に見ているにちがいないという意見である。

真昼の陽光を浴びながら、はでな身なりをした船頭の權をこぐ姿が、うすい緑色の水面から青い空に浮び出る様を眺めた時、彼はそこに Venedig 派の最もすぐれた、最も鮮やかな絵画を見てとったのである。北方の人間がどうしても持つことの出来なかった明朗な眼差しが彼らにはあることを知るのである。

「あいまいな色調を画面に漂わせることをせず、光と影とを巧みに交差させ、この上なく見事な調和を生み出している」

Den 8. Oktober

彼はこの地にきて、自然と人間との調和が見事な芸術を生み出すことを見たのである。

10月9日 彼は海岸にある Marukusturm に登っている。先日、満潮時における潟の壮観

を上から眺めたので、今度は干潮時における潟の様子を眺めたいと思ったのだ。潟について正當に理解するためには、この両方の姿を結び合わせる必要があるというのが彼の考えであった。

ただ漠然と眺めるのではなく、対象を繰り返して見ることで、第一印象などあてにせずすべてを静かに注意深く観察するのである。

1786年9月29日の日記に次のように書かれている。

Doch muß man auf alle Fälle wieder und wieder sehn, wenn man einen reinen Eindruck der Gegenstände gewinnen will. Es ist ein sonderbares Ding um den ersten Eindruck, er ist immer ein Gemisch von Wahrheit und Lüge im hohen Grade. Ich kann noch nicht recht herauskriegen wie es damit ist.

とくにこのように豊富な対象がある場合、それについて何かあることを考えたり、空想したりすることは簡単なことである。しかしそれ自身のために見ようとするならば、そして真実に迫ろうとするならば、それは形成されたもの、作り出されたものが持つ効果によってでなく、その内面的価値に従って判断することが必要であるという考えをゲーテは持っていた<sup>7)</sup>。

10月27日、Terni にて Spoleto 山に登り 3 番目の古代遺跡である水道跡を見た彼は古代の精神の偉大さを認めている。古代人にとって建築物は市民の目的のために利用する第二の自然である。Verona の円形劇場も Assisi の Minerva 神殿においてもそうであった。「真の内的存在を持たないものは、生命も持たない。従って偉大であるわけがなく、また偉大になることも出来ないからである」

Terni, den 27. Oktober, abends

#### IV

「どこに行くのか自分でも分からなかった。旅の途中でさえも、なお心配していたぐらいだ。そして Porta del Popolo の下に来て初めて、私は Rom に来たことを確信したのであ

7) An die Herzogin Luise Rom, den 23. Dezember 1786

Wie leicht ist es bei einer solchen Fülle von Gegenständen etwas zu denken, zu empfinden, zu phantasieren. Aber wenn es nun darauf ankommt die Sachen um ihrer selbst willen zu sehen, den Künsten aufs Mark zu dringen, das Gebildete und Hervorgebrachte nicht nach dem Effekt den es auf uns macht, sondern nach seinem innern Werte zu beurteilen; dann fühlt man erst wie schwer die Aufgabe ist und wünscht mehr Zeit und ernsthaftere Betrachtung diesen schätzbaren Denkmälern menschlichen Geistes und menschlicher Bemühungen widmen zu können.

る」

Rom, den 1. November 1786

Rom からの第一報は感動に満ちあふれている。彼のイタリアにおける目的地はあくまで Rom であった。Rom に行きたいという彼の願望は、この数年間は一種の病気のような状態で、それをなすことが出来るのは、Rom を実際に眺め、Rom に身を置く以外彼にはなかったのだ。

彼は Tirol の山を飛ぶように Rom へと急いだ、「Verona, Vicenz, Padau, Venedig はよくみだが、Ferrara, Cento, Bologna は急いで見て、Flörenz はほとんど見なかった。Rom へ行こうという欲望はそれほど強く、それが一瞬ごとにつのるものだから、もはや足を留めることもならず、Florenz にはわずか3時間滞在しただけである<sup>8)</sup>。」

ゲーテと Rom との関わりはすでに彼の少年時代に始まっている。「私は今や少年時代の夢を生き生きと眼の前に見ている。私の記憶している最初の銅版画を、今や実物として見ている。私が油絵や素描、銅版画や木版画、石膏やコルク細工で、ずっと昔から知っていたものが、今や私の眼の前にあるのだ。どこへ行っても、私は新しい世界の中の知己に会うのだ。何もかも私が考えていたとおりだった。しかもすべてが新しい<sup>9)</sup>」

ゲーテの自伝「詩と真実<sup>10)</sup>」によると、彼が少年時代家の中で一番眼をひいたものが、父親が玄関の間に飾っておいた一連の Rom の風景画であったといわれている。彼はこれらの Piazza del Popolo, Coliseo, Peter 広場, Engel 城等の風景画を覚えていた。イタリアに関するあらゆるものに強い愛着を持ち、自分の時間の大半をイタリア語で書かれた旅行記に費やしていたという彼の父親の強い影響が見られる。

彼が Rom へと急いだ理由の一つに11月1日の万聖節があった。しかし彼の興味をひいたのは、むしろ礼拝堂と同じように全宮殿が誰でも自由に出入りが許され、無料で何時間もの間開放されているということであった。彼は絵画を丹念に眺め、かつて名前すら知らなかったすぐれた芸術家達に出会った。彼が Rom 派の画家 Karl Marrati を評価し愛好するようになったのもこの時からである。彼は古い Rom と新しい Rom の地図を頭に入れ廃墟や建造物を見てまわっている。想像を絶するほどの壮観さと破壊の両方の痕跡を眼の前にして、彼は新しい Rom から古い Rom を選りわけるといふ困難な仕事にうちこんでいる<sup>11)</sup>。

「Rom がどのようにして Rom に続いてきているのか、古い Rom から新しい Rom へ

8) Rom, den 1. November 1786

9) Rom, den 1. November 1786

10) Dichtung und Wahrheit I Jörn Göres Insel s. 19

11) Rom, den 11. November



の連続だけでなく、新旧ローマの各々違った時代の連続を明らかにすることは、観察者には最初から困難なことになる。私はまず第一に半ば隠されている諸問題を自分で感じとることを試みる」

Rom, den 7. November

困難な仕事ではあるが彼は確実に、そしてかつて久しく持ち得なかった心の明澄さと平安をもって Rom の生活を始める。

11月7日

「あらゆる対象をあるがままに眺め、読みとろうとする (alle Dinge, wie sie sind, zu sehen und abzulesen) 私の訓練、自らの眼を曇らせまいとする私の忠実さ、そして、あらゆる僭越さからの完全なる離脱 (meine völlige Enttäußerung von aller Präntention) は、ここに再び効果を示し私に人知れぬ無上の喜びを感じさせている。日に日に現れる新しい珍しい対象、新鮮で偉大なるもの、長い間頭に描きながらも、想像力でもってしては決して到達できなかった一つの全体が与えられる」

Rom den 7 November

彼はこの認識に限りない喜びを感じている。当日 Stein 夫人に宛てた手紙において、最も重要なことで、Rom に来て初めて感じたことは、真剣さをもってこの地を見ること、そしてかつその見る眼をもっているものは堅実さを手に入れるに違いない。少なくとも私は、この世のすべての物をこの Rom でほど正しく評価したことがなかった、と述べている。

Was aber das Größte ist und was ich erst hier fühle; wer mit Ernst sich hier umsieht und Augen hat zu sehen muß solid werden, er muß einen Begriff von Solidität fassen der ihm nie so lebendig ward. Mir wenigstens ist es so als wenn ich alle Dinge dieser Welt nie so richtig geschätzt hätte als hier. Welche Freude wird mirs sein dich davon zu unterhalten<sup>12)</sup>.

彼は Rom を見たいと言う。永遠に続く Rom を、10年ごとに移り変わる Rom など見たいとは思わないのだ。

古代研究の先駆者 Winkelmann の手紙の一節「ローマでは、人はすべての事物をある種の鈍重さをもって求めなければならない<sup>13)</sup>」という言葉は彼を勇気づけた。彼には Rom で

12) An Charlotte von Stein Rom den 7. November 1786

13) Rom, den 13. Dezember

の観察に必要な二つの考察<sup>14)</sup>が明らかになった。まず第一は、この都市の巨大な遺蹟や、すべての美術品に対して、まず最初にそれが成立した年代を尋ねること、Winkelmann が要求したように、時代を区分し、諸民族が採用し時代の経過と共に、漸次発展しついに再び崩壊してしまった諸々の様式を認識することである。つまり、まず歴史的方法から入ること、その時代を考察し、いかなる民族のいかなる時代の作品かを判断することにあつた。

しかし、いかにしてこの認識に到達するのか？ 必要なのは長年にわたり眼を確実に訓練することである。(Eine vieljährige entschiedene Übung des Auges ist nötig) そして、問うことができるためにはまず学ばねばならない。本物の作品と偽物の作品を見抜く確かな眼が必要である。いかに概念が正確で知識ばかり豊富にあっても、それは実際には役に立たない。自らが作品に接し自らの眼でそれを見て判断する能力が必要である。

第二の考察は、ギリシャ人の美術に関することで、あの比類なきギリシャの芸術家達が、人間の形姿から完全なる神々の形姿を作り出すために、いかなる方法をとったのか探究しようと努めることである。これらの像は完全に完結し、そこにはいかなる主要な性格も、推移の過程も媒介も欠けていない。ギリシャ人は、自然を支配している法則と同じ法則によって処置したのではないかとゲーテは推測したのである。

1786年3月、彼は Neapel において Vesuv 登山を3回試みている。3回目には危険をおかし爆発の間の時間を利用し、その火口に流れる溶岩の流出まで眺めている。しかし彼が生死をかけてまで見たものは何ものでもなかった。「見たからといって何一つ有益でもなければ、楽しくもなかった」にもかかわらず彼は見たのである。「ある事柄について千たび話を聞いたところで、その本質はやはり直接観察することによって初めて明らかにされる<sup>15)</sup>」

彼にとつてもものの本質を見ることが重要なのである。彼は何一つ名称とか、言葉だけにとどまることなく、およそ美しいもの、偉大なもの、畏敬に値するものを自分の眼で見て認識しようとした。

1787年3月

「私は多くのものを見て、かつそれ以上に多くのことを考えてきた。今や世界はますます大きく眼前に開かれ、私が以前から知っていたあらゆるものが、ようやく私のものになってきた」 Neapel, zum 17. März

14) Rom, den 28. Januar 1787

15) Neapel, Dienstag, den 20. März 1787

彼は自然の様々な現象や、人間の錯綜をこの地に来て初めて理解し展開することに成功したのである。6月27日、ローマにて彼は Hackert と共に Colonna 画廊を訪れている。Poussins, Claudes, Salvator, Rosa 等の絵を見ながら彼は次のように述べている。

「人は今すぐに再び自然を観察し、あの画家達が見つけ出し、多かれ少なかれ模倣したものを再びそこに見つけ読みとることが出来るなら魂は拡大し清められ、最後には自然と芸術の最高の直感的概念が与えられるに違いない」  
Rom, den 27. Juni

彼は論文「プロピュレーエン<sup>16)</sup>」への序言 (Einleitung in die Propyläen) において、芸術家に向けられる最高の要求は、常に自然にとどまり、自然を研究し、自然を模倣し、自然の現象に似たものを創造することである、と述べている。

しかし、このことは北方の人間にとっては、困難なことであった。彼らはつねに自然に強いられているのである。北国では、その日その時間のためだけでなく、天気の良い晴れた日には、天気の悪い曇った日のために、夏においては冬のために準備し配慮しなければならないのである。主婦は塩漬けや燻製を、男は薪や農産物を貯え家畜の飼料を用意しなければならない。そのため最も美しい日や時間も享受することなく、労働に費される。嵐や雨や雪や寒さのために何カ月もの間、家の中に閉じ込められるのだ。北国では自然に対する自由意志は存在しない。その余地がないのである。自然は常に人間を強制し、人間は常に自然に対決している。

しかし南方の国では、自然がそういう生活をするよう仕向けてくれるのだ。南国ではぼろをまとっているからといって裸とはいえない。自分の家がないからといって、宮殿や教会のひさしの下で夜を過ごせるのだから、追放されたみじめな人間でもない。また翌日の心配をしなくてもいいのだから、彼らは貧困でもない。彼らは自然の懷に入り、自然と調和して生きているのだ<sup>17)</sup>。

Venedig において、干潮時の砂浜でやどかりや小蟹の奇妙な身振りを観察したゲーテは「生物というものは、何と貴い、すばらしいものだろう！ 何とよくその状況に適応し、何と真実に、何とあるがままに存在しているのだろう！<sup>18)</sup>」と述べている。生物がすばらしいのは、状況に適応しているから、自然に調和しているからすばらしいというのが彼の観察の結果であった。

16) Goethes Werke Band XII Verlag C. H. Beck München S. 42

17) Neapel, den 28. Mai 1787

18) Venedig, den 9. Oktober

北国の陰うつな思考から抜け出し、南国の青空の下で、彼は新しいより自由な活動を始め。Rom でスケッチに熱中する彼は、描くために描くというのは、話すために話すのと同じだと言う。もし表現すべきものも、心を刺戟するものも何もないければ、そして価値ある対象が発見できないということになれば、当然スケッチをする人もいないのである。「ところがこの地方では、人はどうしても芸術家にならずにはおれないのだ。それほどあらゆるものが眼の前に現れ、心はますます充実し、何かを制作せずにはおれないのだ<sup>19)</sup>」。

ゲーテは Sizilien で読んだ Homer を、彼はあくまで自然であったと言う。しかもその自然は純粹さと切実さをそなえていた。古代ギリシャの詩人達は存在を描いたが、我々は効果を描く。彼らは恐ろしいものを描いたが、我々は恐ろしそうに描く、彼らは快適なるものを描き、我々は快適に描くのだ、と言う。

Raffael は、「思考の正確さ故に傑出した存在であった」「彼はつねに自然のように正しく、我々が自然をほんの少しか理解していないというこの点において、彼はまさしく最も徹底的な理解を示していた<sup>20)</sup>」と述べている。

ゲーテはこれらの作品を見て、彼らが自然に対して偉大な知識を所有していること、彼らが、何が描かれ得るのか、いかに描かれねばならぬかについて、同じく偉大なる概念を所有していることに気づくのである。ゲーテは「これらの作品は、真なる、自然の法則に従って生み出された最高の自然作品である。ここではすべての任意的なもの、空想的なものが崩壊し、そこには必然性がある。神がある<sup>21)</sup>。」と述べている。

1788年1月25日 ゲーテは Karl August 公への手紙<sup>22)</sup>に次のように述べている。

「私の旅行の主な目的は、ドイツで私を苦しめ、ついには私を使いものにならなくした肉体と精神の病からいやされることでした。そうして真の芸術への熱い渴望をしずめることでした。第一の願いはかなりに、第二の願いは完全に成功いたしました。……はじめてローマにきて間もなく気がついたのは、自分が芸術についてはほんとうは何も知らなかったということ、それまではただ芸術作品に自然が一般的に反映しているのを賞賛し享受していたにすぎないということでした。ここにきてはじめて別個の自然が、芸術のより広い世界が目の前に開かれました。いやそれは芸術の深淵とも言うべきものであって、私はかねてから自然の深淵にわが眼を慣しておりましただけに、いっそうの喜びをもってこの深淵をのぞきこんだのであります」

19) Frascati, den 2. Oktober

20) Dezember 1787 Bericht

21) Korrespondenz Den 6. September

22) ローマ, 1788年1月25日 ゲーテ全集第15巻 潮出版

ゲーテがイタリアにおいて見たものは、芸術の深淵であった。自然と芸術と人間が調和をなし一体となって偉大な芸術の深淵を作りあげていたのである。

**Text:**

Goethes Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden

Johann Wolfgang Goethe Gedenk Ausgabe Der Werke, Briefe und Gespräch

Johann Wolfgang Goethe Dichtung und Wahrheit I Insel

ゲーテ全集 潮出版社

**Literatur:**

Begriffsbestimmung der Klassik und des Klassischen Herausgegeben von Heinz Otto Burger  
Wissenschaftliche Buchgesellschaft

Deutsche Literaturgeschichte Fritz Martini Alfred Kröner Verlag

Geschichte der deutschen Literatur im 18. Jahrhundert Band II Hermann Hettner Aufbau-Verlag

古典期のゲーテ 未来社刊 グンドルフ著

エーミール・シュタイガー ゲーテ中巻 人文書院